

モンゴル時代の『直説大学要略』二断片：ロシア所蔵Дх19018及びДх19019の考察

川澄，哲也
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7392968>

出版情報：言語文化論究. 55, pp.21-27, 2025-10-29. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



モンゴル時代の『直説大学要略』二断片 ——ロシア所蔵 Дх 19018及び Дх 19019の考察——

川 澄 哲 也

1 序言

ロシア科学アカデミー東洋文献研究所には、“Дх 19018”、“Дх 19019”と文献番号を付された漢語断片2点が保管されている。当該2断片はこれまでにいくつかの先行研究（次節参照）で扱われてきたが、その分類や内容をめぐっては、なお議論を要する問題が残されていた。このたび筆者は両断片に対する考察を進め、それら問題を解決したので、本稿で報告したい。

2 従来の研究

まず本節では、先行研究における2断片の扱われ方を概観する。図1は、《俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻》（以下『俄藏敦煌文獻』）全17冊の最終巻に掲載された“Дх 19018”及び“Дх 19019”の写真である。

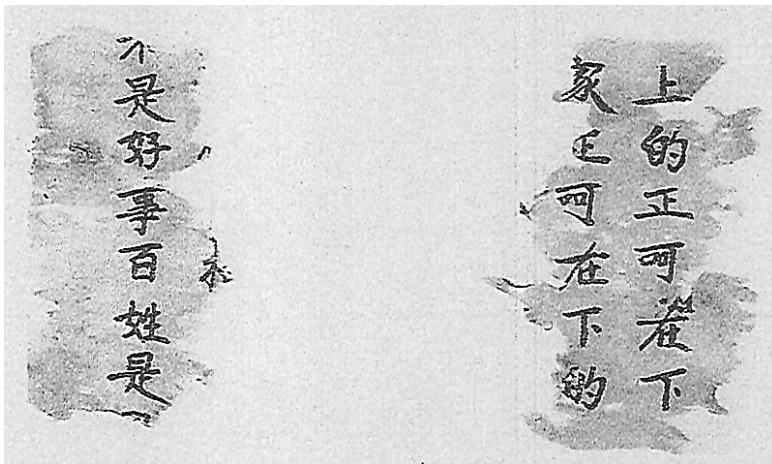


図1) Дх 19018 (右)、Дх 19019 (左) (『俄藏敦煌文獻』17、p. 318)

上記の掲載書籍名（、或いは文献番号中の“Дх”¹⁾）からも明らかなように、これら断片は元々、敦煌出土の資料（「敦煌文書」^{もんじょう}）として分類されていた。

これに対し榮（2007：540）は、「Дх. 18990から Дх. 19092は内容と性質から見て、いずれも黒水城文献であろう。それらがロシア蔵敦煌文献の分類番号の最後に集中して置かれている点も、このような見方と合う」（筆者訳）と述べ、従来の分類に誤りがある可能性を指摘した²。なお榮（2007：540）では続けて、Дх 18990から Дх 19092のうち、書写年代の記載等、黒水城³からの出土である明証をもつ文献を30点ほど列挙するが、その中に Дх 19018と Дх 19019は含まれていない。

その後、孫他編著（2015）は、榮（2007）を始めとする先行研究が指摘する『俄藏敦煌文献』混入の黒水城文献⁴を全般的に整理、考察した。上記2断片もその中で扱われ、新たに以下のような解説が加えられた。

・Дх 19018に対する解説（孫他編著 2015：809 [筆者訳]）

「本文書中の用語は元代文書に極めて似ており、黒水城から出土したと証することができよう。また本文書は Дх 19019文書と字体が同じであり、一つの文書のはずである。」

・Дх 19019に対する解説（孫他編著 2015：811 [筆者訳]）

「本文書は Дх 19018文書と字体が同じであり、一つの文書のはずである。そして Дх 19018文書は用語が元代文書と似ており、故に黒水城から出土したはずである。そのため、本文書も黒水城から出土したはずである。」

用語が元代文書に似ているという新たな論拠を提出しつつ、両断片は敦煌文書ではなく、黒水城文献に分類されるべきであるという榮（2007）の考えを承継している。孫他編著（2015）では明言していないが、ここで言っている「用語」とは恐らく“呵”のことを指しているのであろう。この要素は、仮定や条件等を表す句中助詞として、13～14世紀の漢語文献に多く見られることが知られている⁵。これと、敦煌文書の下限年代が11世紀初頭である事実⁶、及び黒水城文献の大部分がモンゴル時代のものである事実⁷をあわせて考えると、Дх 19018と Дх 19019は敦煌文書ではなく、黒水城文献だと考えるのが合理的である。よって筆者も、分類修正を主張する上記先行研究に同意したい（分類の問題については4.1節で再度取り上げる）。

一方で従来の研究では、本断片が記す内容については明らかにされてこなかった。これに対し筆者は今回新たに、当該断片2点の内容を同定した。以下ではこのことを報告するとともに、その意義について述べてみたい。

3 断片の内容

本稿の論題にも挙げたとおり、Дх 19018及び Дх 19019の内容はいずれも『直説大学要略』である。この文献は、皇帝クビライの儒臣であった許衡（1209-1281）が当時の口語を用いて『大学』を解釈したもので、13世紀中国の北方口語を映す、極めて重要な資料である⁸。各種の版本が伝存しているが、ここでは現行のテキストのうちで最も早い⁹とされる、明正徳十三年（1518）刊の別集¹⁰に収められたテキストを掲げ、2断片に記されていた箇所を示す¹¹。



図2) Dx 19018の対応箇所(傍線筆者)



図3) Dx 19019の対応箇所(傍線筆者)

Dx 19018の末尾に字句の異同¹²が見られるものの、両断片が『直説大学要略』を反映していることは一目瞭然であろう¹³。

4 同定の意義

上で示した Dx 19018 と Dx 19019 の内容同定には、いずれもささやかなものではあるが、3つの意義があると考えられる。以下、順次記述したい。

4.1 Дх 19018、Дх 19019の分類確定

まず、これを以て2断片の分類を疑いの余地なく黒水城文献に確定できたことである。第2節で見たように、同様の主張は既に先行研究でもなされていたが、確固たる証拠を提出するまでには至っていなかった。今回の同定は、両断片が黒水城文献であることの確証とすることができる。上述したとおり『直説大学要略』は13世紀の許衡の手になる文献であるため、11世紀初頭を下限年代とする敦煌文書に現れることはあり得ない。

4.2 『直説大学要略』の古版本提示

次に、『直説大学要略』の成書により近い、古い版本を提示できたことである。先行研究で利用されてきた該書最古のテキストは、前節でも挙げた明正徳十三年（1518）刊の別集に入る版本であるが、竹越（1996：22）はそれより早い別集として、『北京図書館古籍善本書目』集部元別集類に「魯齋遺書六卷 明成化十年倪顯刻本」なるものが著録されていることを報告する（但し竹越氏未見）。明成化十年は西暦1474年に当たり、ここにも『直説大学要略』が収められていると仮定すると、それが従来知られる現存最古の版本だということになる。一方、本稿が内容同定した2断片は、少なく見積もってもそれより更に1世紀ほど早い時期の古版本を反映している。第2節で述べたとおり黒水城文献はその大半がモンゴル時代のものであり、下限年代は14世紀の終盤だからである¹⁴。このような古版本の提示に意義があることは、「テキストは一般にいつて古いほどよい」（太田 1958：412）という言語史研究の原則から明らかである。現状では断片2点の提示のみで、古版テキストを研究に利用するにはまだ程遠いと言わざるを得ないが、今後同種の文献が発見、蓄積されれば、漢語口語史を始めとする関連諸分野の研究に寄与できる可能性も増す。更なる資料の出現を期待したい。

4.3 『直説大学要略』の流布状況実証

最後は、『直説大学要略』の流布状況の一端を実証できたことである。竹越（1996：10）は、許衡の各種別集の後人序における『直説大学要略』への言及内容に依拠し、「元から明にかけて単刊の『直説大学要略』がある程度流布していたことが予想される」と述べた。今回の同定により、『直説大学要略』がモンゴル時代に遠く黒水城にまで伝わっていた事実を明らかにすることができた。Дх 19018、Дх 19019の2断片は、竹越（1996：10）の「予想」の正しさを裏付ける物的証拠とすることができるだろう。

5 結語

以上、本稿ではロシア所蔵の漢語断片 Дх 19018及び Дх 19019を扱い、その内容を同定するとともに、正しい分類が黒水城文献であることを確定させた。両断片は合計しても20文字に満たない小さなもので、現状の分量では研究の進展に大きく貢献する資料とは言い難い。しかしながら、『直説大学要略』古版の存在を証し、その更なる発見を期待させる資料として、またモンゴル時代における『直説大学要略』の流伝状況を物語る物証として、その学術的価値は決して小さくないと考える。

注

- 1 “Дх”は「敦煌」のロシア語表記“Дуньхуан”の略称で、主にはロシアのオルデンプルグ（С. Ф. Ольденбург）探検隊の敦煌将来品に冠される（榮 2007：535）。
- 2 Дх 19018と Дх 19019に対する言及は榮（2007）が最初であると思われるが、所謂「敦煌文書」の中に黒水城文献が紛れ込んでいるという指摘自体は、ロシアのメンシコフ（Л. Н. Меньшиков）を始め、榮（2007）以前の研究でも屢々なされてきた（榮 2007、pp. 535-541参照）。榮（2007）は、それら先行諸研究の成果と自身の新たな発見を統合したものである。なおこのような誤分類が生じるに至った経緯について榮（2007：534）は「種々の原因に由り」（筆者訳）とのみ述べる。
- 3 現在の内モンゴル自治区アラシャン盟エチナ旗にある、西夏（1038-1227）からモンゴル時代（大よそ、所謂元朝～北元期）にかけての城郭遺跡。コズロフ（П. К. Козлов）率いる1908年のロシア隊を皮切りに、20世紀の間、各国による発掘が行われ、夥しい量の文物が出土した。なお「黒水城」は当地の西夏時代の呼称であるが、先行研究の中にはモンゴル時代に関する議論でも「黒水城」という名称を用いるものがままたり、本節で言及する2研究もそれに該当する。それら先行研究と用語の統一を図るため、本稿も一貫して「黒水城」という名称を用いる。
- 4 黒水城からは西夏語、漢語、ウイグル語、モンゴル語、チベット語など多言語の文献が出土しているが、本稿では（前注同様、先行研究と用語を統一する必要からも）黒水城出土の漢語文献を指して「黒水城文献」と呼ぶことにする。
- 5 句中助詞“呵”の時代性については、孫（2006）がp. 58の附表で挙げる、各種文献における用例数の統計が参考になる。
- 6 榮（2007）、p. 542参照。
- 7 李編著（1991）、p. 10、或いは杉山（1995）、p. 228参照。
- 8 『直説大学要略』の成立過程や言語特徴の詳細については竹越（1996）を参照されたい。
- 9 宮（2006）、p. 70参照。
- 10 『魯齋全書』七卷、明郝綰輯、内閣文庫蔵。『直説大学要略』は巻四に収められている。
- 11 Дх 19018に対応する図2傍線部は第10葉の裏、Дх 19019に対応する図3傍線部は第7葉の表に当たる。つまり『直説大学要略』においては、文献番号の若いДх 19018よりも先に、Дх 19019の内容の方が現れる。ちなみに図2のうち『直説大学要略』の内容は8行目の「好法度」までで、続く『讀易私言』は別の文献になる。
- 12 竹越（2007：11）に基づく、現行の諸版本では“孩”の上に“的”が入るものはないようである。なお竹越（2007：11）ではこの箇所が“一家正呵。在下孩每都正。”と記されており、“孩”の下に“兒”が脱落している。
- 13 孫他編著（2015：810）の録文ではДх 19019の“百”の右隣の文字を“□”、つまり文字の存在は確認できるものの判読は不能としていた。今回の文献同定により当該部分には“相”を補うことができる。Дх 19018の文字の並び方からすると、もとの文書では1行あたり10文字が書かれていたと推断できる。そのため“百”の右隣にはその10文字前の“相”があったはずである。わずかに残る左端部分も木偏と見てよいだろう。
- 14 黒水城文献の中で最も新しい紀年は「宣光二年」（1372）で、計6点の文書に確認できる（いずれもロシア所蔵品で、文献番号はTK194V、TK204V、TK211V、B53V、Дх1339V及びДх2158V）。

なお孫他（2016：1950）には「宣光八年」と判読された内容をもつ中国蔵の断片（AE206 ZHi45 正）が掲載されるが、当該断片を写真（塔拉他主編 2008：2334）で確認したところ、文字が薄く不鮮明で、その読みが正しいかどうかを判断できなかった。ただ、いずれにせよ、黒水城文献の下限年代が14世紀終盤であることは確かである。

参 考 文 献

- 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所、俄羅斯科學出版社東方文學部、上海古籍出版社編（2001）《俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻》17. 上海：上海古籍出版社.
- 李逸友編著（1991）《黑城出土文書（漢文文書卷）》北京：科學出版社.
- 宮紀子（2006）『モンゴル時代の出版文化』名古屋：名古屋大學出版會.
- 太田辰夫（1958）『中國語歷史文法』東京：江南書院.
- 榮新江（2007）《《俄藏敦煌文獻》中的黑水城文獻》沈衛榮、中尾正義、史金波主編《黑水城人文與環境研究——黑水城人文與環境國際學術討論會文集》北京：中國人民大學出版社、534-548.
- 杉山正明（1995）『クビライの挑戦——モンゴル海上帝國への道』東京：朝日出版社.
- 孫繼民、宋坤、陳瑞青、杜立暉、郭兆斌編著（2015）《英藏及俄藏黑水城漢文文獻整理（上）（下）》天津：天津古籍出版社.
- 孫繼民、宋坤、陳瑞青、杜立暉（2016）《中國藏黑水城漢文文獻的整理與研究（上）（中）（下）》北京：中國社會科學出版社.
- 孫梅青（2006）《助詞“呵”的語法演變》《語言研究》第26卷第2期：53-58.
- 塔拉、杜建錄、高國祥主編（2008）《中國藏黑水城漢文文獻》全10冊. 北京：國家圖書館出版社.
- 竹越孝（1996）「許衡の經書口語解資料について」『東洋學報』78-3：1-25.
- （2007）『直說大學要略』校本『KOTONOH』55：4-11.

〔附記〕

本稿の脱稿間際に、馬振穎、鄭炳林（2015）《《俄藏敦煌文獻》中的黑水城文獻補釋》（《敦煌學輯刊》2015年第2期、pp. 129-150）の存在を知った。この論文では榮（2007）未収の『俄藏敦煌文獻』混入黒水城文獻を数点補うとともに、榮（2007）で未詳だった混入文獻約30点の内容を明らかにするが、その中でДх 19018とДх 19019については触れられていない。

〔謝辞〕

本研究はJSPS 科研費「中国青海省大通県モンゴル族居住地域の漢語方言調査研究」（課題番号：21K00515）の助成を受けている。執筆の過程では、神戸市外国語大学の竹越孝教授、広島大学の荒見泰史教授に草稿をご一読頂き、有益なコメントを賜った。またLewis & Clark CollegeのKeith Dede教授には英文をチェックして頂いた。ここに記して3氏に謝意を表したい。当然のことながら、本稿に含まれる不備や誤りはすべて筆者によるものである。

Two fragments of Chinese *Zhi-shuo Da-xue Yao-lüe* (直説大學要略)
from the Mongol period

— Dx 19018 and Dx 19019 preserved in Russia —

KAWASUMI, Tetsuya

In this paper, two Chinese fragments (Dx 19018 and Dx 19019) kept at the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences are studied. These fragments were originally classified as Dunhuang (敦煌) documents. This study identifies the contents of these fragments as *Zhi-shuo Da-xue Yao-lüe* (直説大學要略) written during the Mongol period (13th -14th centuries) and proves that they are Khara-khoto (黑水城) manuscripts that were mistakenly included into the Dunhuang collection. This paper also shows that these are the oldest extant editions of *Zhi-shuo Da-xue Yao-lüe* and that they are material evidence of the circulation of the book at that time.